ガラスの天井

GLASS CEILING

辻仁成

ガラスの天井

GLASS CEILING

辻仁成

工业学院图书馆
藏书章

ガラスの天井（てんじょう）

一九九二年三月二五日　第一刷発行
一九九二年四月三〇日　第二刷発行

著者　辻（つじ）仁成（ひとなり）
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社
〒101-50　東京都千代田区一ツ橋二-五-一〇
編集部（〇三）三二三〇-六一〇〇
販売部（〇三）三二三〇-六三九三
制作課（〇三）三二三〇-六〇八〇
電話
印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1992 H. TSUJI, Printed in Japan ISBN4-08-775156-2 C0095

¥1,000

ガラスの天井　目次

存在証明――9
一本の電話――14
いかにして孤独を得るか？――19
大道芸人の憂鬱――27
ガラスの天井――36
時間という尺度――43
神の不在――49
生まれるのが遅すぎた世代――55
寿命について――63

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

「しんゆう」について——68
神の作ったシナリオ——76
存在証明　2——85
スーパーマーケットにて——90
他人の見方——95
自由という不自由について——101
個人主義——106
家族という遠い島——110
大人になるということは——118

敬称を略す——122
消せない記憶——127
ZOO——132
愛の遍歴——136
夜は眠るためにある——141
僕のビート・ジェネレーション——145
誰がケラワックを殺したか——149
師——153
オイッ、人間失格——159

クリスマス――164
死という入口――168
アメリカ――172
書き続けること、そして歌い続けること――178
僕という不可解な存在――183
あとがき――188

装丁　大木 裕

ガラスの天井

The taste of success is sweet, but
I keep alive incentive to
push on further.

——Antonio Blanco

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

存在証明

果たして自分が誰なのか？　この問いに僕は生まれてから今日まで、ずっと悩まされ続けている。僕が小説に向かう一つの理由がそこにある。書くことによって、僕が誰かという謎を明かしたいのだろう。むろん、死ぬまで書き続けたとして、その謎の答えに近づくことさえできないかもしれない。それでも書き続けるのは、自分が誰であるのか、というただその問いかけのせいなのだ。

ほとんどの人にとって、身分証明書を使わず、自分という存在を証明することは不可能に近い。例えば、外国でパスポートを紛失した経験のある方なら、その孤立したさみしさはよく御存じのはずである。英語圏ならともかく、言葉がまったく通じない国だったとしたら、我々はいったいどうやって自分のことをこの現実に存在させられるだろう。

平成三年、十一月四日付けの朝日新聞に、このような記事の見出しを見つけた。

夫はだれだった――

社会面の、四分の一ページほどの紙面を割いて、そのミステリー小説もどきの事件が掲載されていた。世田谷区の病院で病死した中年男性の身元が確認できないでいる、という内容だった。五年間連れ添っていた内縁の妻が、その男性の身元を調べようとしたところ、本籍地にその人物に該当するものが見当たらなかったのである。男が持っていた医師の身分証明書も、戸籍抄本のコピーも、全て偽物であることがわかった。

「山森将智家（やまもり・まさちか）〈京都生まれで職業は医師〉」と自称していたその人物は果たして誰だったのだろう。

何故彼が自ら、自分を消そうとしたのか、その理由は分からない。しかし、彼の残した遺品の中に、一つだけ気になるものがある。原稿用紙七百枚に及ぶ書きかけの小説だ。記事を読んでいた僕の目が止まったのは、まさにその部分に達した時だった。心臓が内側からせりあがってくるのを感じた。血液の流れが一瞬速くなるのを覚えた。僕は日中の繁華街で、幽霊にでも出くわしてしまったかのごとく驚いたのである。七百枚の未完の小説。

いったい彼はその中で、何を残そうとしたのだろう。現実の世界では、自分を消し続けた男が、原稿用紙の中に記した、彼自身の生の声。どこにも属さないという不安の中にいて、書き続けた心の内。ドクドクと僕の内側を連打する脈は、山森と名乗り続けた男のことで、はちきれそうになった。僕はその時彼に親近感さえ覚えはじめていたのである。

大学生の頃、僕は友人とある遊びをやったことがある。架空の人物を生み出す、というその遊びに、暫くの間、僕は熱中した。

僕達は、まず紙切れの上にその人物の名前を書くことからはじめた。名字と名前の様々な組み替えを行った。まるで科学者たちの遺伝子操作のように。気に入った氏名が誕生すると、僕らは、その人物について、語り始めた。生年月日、血液型、出生地、国籍、本籍地、家族構成、更には、様々な経歴や学歴をつけたしていく。学歴は幼稚園からはじまって大学まで、途中の転校や浪人の時代についても細かくイメージした。性倒錯者や二重人格者にしたてあげたこともあった。フェミニストや、誰かのエピゴーネンにすることもあった。彼をホモセクシュアルに走らせた要因を築き上げ、僕らはもう一つの人格を楽しんだ。

二人の間に、その架空の人物像が完全に根付くまでに、三ヶ月ぐらいの時間を要したが、人格が一致を見始める時、僕らの喜びはひとしおだった。僕らは、彼について、授業の合間や、放課後、更に深く話しあうことを日課として楽しんだ。彼のために、銀行口座を作り、サークルの会員に加入させ、女友達に彼のことを吹聴して回った。

半年もする頃には、僕ら二人以外の者達も、彼のことについて語りはじめていた。彼はいつか人格を持ち、二人の空想を越えていった。そして、更に一年もする頃、僕らは彼を事故死させ、彼そのものを伝説化させ、友人達の心の内に永遠に残すことに成功するのだ。

僕達が、何故そんな遊びを楽しんだのかは、わからない。このことに関してはいずれ小説にでもしてみようとは思っているが、山森将智家と名乗った男が、自分を消そうとしたことにどこか通じるものがある気がしてならない。

果たして自分が誰なのか？　このことは、五十億もの人間がひしめいている地球上では、あまりにも小さな問題である。一日、四万人もの子供達が餓死している現実の中、それは、金持ちの道楽のような悩みにすぎないのかもしれない。

それでも僕は考えてしまう。身長百七十センチ、体重五十七キロのモンゴロイド系の僕

は、いったい、どの位置に属する誰なのか？　ということを。

山森将智家と名乗った中年男性は、その死の間際、五年間連れ添った女性の「あなたは一体だれなのですか？」という質問に対して、こう答えている。

「死ぬしかなかった。本当は生きていたかったんだ」と。

彼が偽造した、浜松医科大学の「身分証明書」の中に、顎を引き、唇を真一文字に結んだ男の顔写真がはりつけられている。過去について雄弁だったその男は、自分を消そうとしていたのではなくて、もしかしたら、百パーセント創作しようとしていたのかもしれない。

一本の電話

ある日一本の電話がかかってきた。午前中だったせいもあり、その男の声は夢の中の続きのように乾いて耳の奥で響いた。

「辻さんですか？」

聞き覚えのない声だったので、僕は少し用心をして、たぶん数秒の間隔をあけてから、ええ、と答えた。僕が辻本人であることを確認してから、その男性は一気に何か、僕の知らない世界のことを話し始めた。多少、おこっているような、つきはなした喋り方だった。

「昨日、会う約束をしていた、ＣＢＣの上原と申します。随分お宅の回りを歩きましたが、そう、二時間もの間、聞いた住所のあたりを探したのですが、結局、お宅へ辿りつくことができませんでした。電話も何回となくかけさせて頂きましたが、ご不在のようで……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo